

#### 48. 飽和潜水従事者の減圧性骨壊死に対するMRI検診

野呂純敬\*<sup>1)</sup> 川島真人\*<sup>1)</sup> 田村裕昭\*<sup>1)</sup>  
毛利元彦\*<sup>2)</sup>

(<sup>\*1)</sup>医療法人玄真堂川島整形外科病院  
(<sup>\*2)</sup>海洋科学技術センター)

当院では、1994年と1995年の2回、海洋科学技術センターで飽和潜水に従事している計8名に対し、X線とMRIによる両肩と両股の減圧性骨壊死検診を行った。今回その結果を報告する。

**【対象と方法】**対象は全て男性で、平均年齢33.1歳(19～54歳)であった。検診を2回とも行ったのは5名、1回のみは3名であった。全員に対し、両肩両股のX線撮影とMRIを行った。使用機器は東芝製MRT-50A/IIで、冠状断像と横断像を撮影した。全員とも検査時無症状であり、飽和潜水従事前後、従事中とも症状はなく、骨壊死の既往もなかった。

**【結果】**骨壊死の所見は、X線・MRIとも両股・両肩いずれにも認めなかった。

**【考察】**骨壊死の画像診断法としてはX線が一般的ではあるが、早期の場合明らかではないことが多い。われわれの経験でも、潜水漁民の減圧性骨壊死においてMRIによって初めて診断できた症例がある。MRIは、X線や骨シンチグラフィと異なり放射線被曝がないことが長所ではあるが、撮影時間が長いこと、装置が大がかりで検査施設に限られること、ややコストが高いことが欠点である。しかし、骨壊死は一旦発生し進行すると治療に長期間を要し、人工骨頭置換術を行わざるをえないこともあり、優秀な飽和潜水従事者の生活を脅かし、貴重な人材を失うことにもなりかねない。今回、幸いにも骨壊死罹患者がなく、安全な飽和潜水が行われたことが明らかになったが、潜水従事者には積極的にMRIによる骨壊死検診を行い、不幸な事故を未然に防ぐことが重要である。

#### 49. レジャーダイバーに見られるいわゆる減圧症の問題点

杉山弘行\*<sup>1)</sup> 神山喜一\*<sup>2)</sup>

(<sup>\*1)</sup>都立荏原病院脳神経外科  
(<sup>\*2)</sup>同 高圧酸素治療室)

**【目的】**レジャーダイバーはその特徴の一つとして、健康状態の不透明さを持っている。今回我々の施設に減圧症疑いで訪れたレジャーダイバーの健康状態について、若干の知見をえたので報告する。

**【方法】**対象は平成7年1月より平成7年6月までの半年間に、DAN及び連携医から紹介された減圧症疑いの患者である。患者は一般あるいは救急外来に減圧症疑いで訪れている。高圧酸素治療(HBO)は必ずしも全員が受けてはいない。

**【結果】**患者は合計14名であった。そのうち、1名は精神科入院し、1名はもやもや病を持ち、1名は高度の不整脈があった。

**【結論】**レジャーダイバーの問題点は、①自己の健康状態について理解がない、②いわゆる減圧症症状発症後、どこで治療を受けたらいいのか知らない状態である、③不十分な治療で終わる可能性が高いなどがある。レジャーダイバー特有のこれらの点を今後改善していく必要がある。